

関連した新しい展開があった。1つは、かねて文通していたベルリン自由大学の歴史人口学者の Arthur Imhof 教授を招いて、本学部で講演や討論の会をもつとともに、京都ドイツ文化センターで開かれた「都市の歴史人口学」の研究会に参加したことである。これは、子育てについての歴史的な文献を読み、解釈する場合にも、1つの重要な基礎となると考えたからである。もう1つは、現在の人々が、人生の歩みをどのようにとらえ、表現するかを調べる方法の1つを開発しつつあることである。それは、描画と言語的記述、そして段階区分からなるものである。この方法を仮に描画によるライフ・コース研究(LCS-D)と名付け、広い年齢範囲の対象への適用を試みているが、結果の一部を日本心理学会第50回大会(名古屋、1986年10月)で、加藤教子とともに発表する、生涯発達心理学の研究に、何らかの寄与ができるものに行きたい。

第3に、国際基督教大学の源了圓教授を代表者とする3年計画の研究(通称「型」研究会)に参加して、活動を始めた。10名のメンバーのうち、心理学者は筆者を含めて2名であるが、異なった領域の、しかも関心を共有する内外の研究者との相互作用から得るところが多く、毎回の会合を楽しみにしている。

以下に従来からの研究で、いくらか進展したものを報告する。

〔児童発達観の研究〕これは歴史的研究と、現在の心理学的研究とに分かれるが、成果が現れたのは前者の方が主である。以前に予告した論文のうち、Stevensonほか(編)の本(Child development and education in Japan. New York: Freeman, 1986)の中の論文は、上記の両方の領域にまたがっているが、歴史の方にウエイトのかかったものである。また近世日本の児童発達についての概念の研究も歴史的なもので、この9月に出る International Journal of Behavioral Development に掲載される。そのほか、日本の児童

発達観に関する小さいエッセイが、詫摩(監)の本の中に出ている(ブレーン出版、1986)。以上の研究は、prescriptive なものであったが、それと関係づけつつ進めて行くべき descriptive な側面での歴史研究の1つが、この巻に載っている桑名・柏崎日記の分析である。この日記のこれまでの研究者の疑問点の多くが、翻刻者の澤下春男氏の下に届けられた渡部家(渡邊または渡邊)の系図の写しによって解消したことが、筆者の論文の記述にも影響を与えている。本巻のスペースをかなり多く取った論文ではあり、次巻でも同じ位の長さの論文となるが、それでも約200万字あると思われる両日記の内容を10万字で書くこととなり、別の形での出版も考えている。

〔家族関係など〕家族関係インヴェントリー(FRI)を小児医療の領域で試用してきたが、鈴木榮教授らと論文を書いた。その中でマニュアルは別に小嶋が書くこと明記されているので、宮川充司・内山伊知郎君とともに作成せざるを得なくなった。また本教室の村上隆氏による3相因子分析法を、夫婦のFRI得点に適用した結果などについては、日本教育心理学会第28回総会(1986年10月、福岡)で発表する。

また、ここ数年以上にわたって、筆者と関係者によって進められてきた乳幼児を含む社会的相互作用にかかわる諸研究をまとめて見ると、新しい仮説の設定が可能となったり、今後の研究の課題が浮び上がってくると思われ、そのまとめに共同で取りかかっている。

子どもをとりまく家族関係の理解という、市販誌への連載講座(小学校学級担任、1986,4-9月号)では、家庭・学校・地域の連携という視点を強調したつもりである。

そのほか、心理学の教科書(北尾と共編、有斐閣、1986)が出た。また、9月に出る予定の名古屋大学関係者による心理学の教科書(培風館)では、発達の章を担当した。

(1986年8月16日)

## 研究経過報告——昭和60年度

田 畑 治

### 1. カウンセリング過程の研究

この領域では2つの発表を行うことができた。いずれも中高年婦人の事例研究であった。1つは「心理療法に

おける動物のテーマの内的意義(I) —ある家庭内暴力の娘をもつ母親の心理面接を通して」(日本人間性心理学会第4回大会発表論文集、日本女子大学、50-51頁、

昭和60年10月)であり、もう1つは「児童期に母親喪失体験をもつ中年婦人のカウンセリングの特徴」(名古屋大学教育学部紀要-教育心理学科-, 第32巻, 105-120頁, 昭和60年12月)である。

カウンセリングの方法論に関する論文として「私のカウンセリング」(田中正一編『カウンセリングと生涯学習』共栄出版, 226-236頁, 昭和61年3月)がまとめられた。これは、日本相談学会第18回大会が東京学芸大学で昭和60年5月に開かれた際、そのワークショップで講演したものであり、筆者のカウンセリングに対する最近の問題意識が展開されているものといえよう。

## 2. 心理臨床家の養成, 教育・訓練の問題

この領域は他人の事例研究へのコメントが位置づけられる。今年度は、塩尻瑠美・片山登和子氏他(片山心理相談室)「短期心理療法の症例——サイコロジストの開業心理療法クリニックにおける諸問題: 第2報, 治療期間」の指定討論を, 上地安昭氏(兵庫教育大学)「時間制限心理療法による青年期治療——対人恐怖症の治療」の司会を, それぞれつとめた(日本心理臨床学会第4回大会, 横浜国立大学, 昭和60年11月)。また田中宏尚氏(鳥取大学)の「教師に不向きだとわかり drop outしようとした教育3年男子の事例」へのコメントをつとめた(第19回全国学生相談研究会議, 山形大学, 昭和61年1月)。

## 3. 臨床青年心理学, 学生相談, エンカウンター・グループなどへの接近

この領域では, つぎの2つが発表された。1つは「青年期のカウンセリング事例-心因反応を起こした学生の

退院後のカウンセリング」(田中正一編『カウンセリングと生涯学習』共栄出版, 80-91頁, 昭和61年3月)であり, もう1つは恒例のグループ合宿のもので「再び残暑の中津川でのグループ-“沈澱, そして湧出”の体験」(昭和60年度厚生補導特別企画, 第9回自己発見のための合宿セミナー, 名古屋大学学生相談室, 28-30頁, 昭和61年3月)である。

## 4. 教育臨床, 教育の人間関係の研究

この領域では学会シンポジウムに話題提供者として招かれた。1つはシンポジウム『生徒指導と学校カウンセリング』で「登校拒否と教育相談」(日本教育心理学会第27回総会発表論文集, 国立教育研究所, 14頁, 昭和60年9月:『教育心理学年報』第25集, 14-15頁, 昭和61年3月)であり, もう1つはシンポジウム『登校拒否の指導をめぐる』で「親の“グループ”による面接教育相談を通して」(日本行動療法学会第11回発表論文集, 金沢大学, 16-17頁, 昭和60年11月:『行動療法研究』, 第11巻第2号, 16-20頁, 昭和61年3月)である。

## 5. その他の活動

①「家出と放浪——心の旅の軌跡を通して」(『教育と医学』特集: 教育と旅——移動・遍歴——, 第33巻第7号, 49-55頁, 昭和60年7月)。

②「心理療法」「ファミリー・セラピー」「分析的心理学」「レクリエーション療法」(伊藤隆二・岡田幸夫・隠岐忠彦・黒田実郎編『乳幼児発達事典』岩崎学術出版社, 昭和60年12月)。

(昭和61年9月15日記)

# 研究経過報告

若林 満

## 1. 研究活動と学会報告

今年度は従来から継続のプロジェクトに加え, 新しいものも加った。①組織パーソナリティに関する研究は今年も実施されたが, この成果は共同研究者の村上隆助教授, 院生の斎藤和志君との連名で, 第35回東海心理学会において2連続報告として発表された。②上記と並行し, 愛媛大学の中村雅彦講師と斎藤君との共同で先端技術に関する態度調査が進められてきたが, 現在中間段階のデータ処理を終り, その成果は本年度の日本社会心理学会に

おいて発表された。この調査では宇宙開発に対する態度がチャレンジャー号の爆発事故の前と後で, また原子力発電に対する態度がチェルノブイリ原発事故の前と後で調べられているので, 今後事故の影響について詳しい分析を進めていく予定である。③昨年度の日本語版WAMS (Women As Managers Scale) の開発に続いて, 今年度はWAMSと女性リーダーシップに対するステレオタイプとの関連の研究が行われた。研究の成果は, 共同研究者の宗方君(院研究生)との連名で, 本年度の東海心